

# コンパクト Lie 群の 極大対蹠部分群

田崎博之

筑波大学数理物質系

幾何学シンポジウム

2016 年 8 月 28 日

# 極大対蹠部分群の分類

古典型コンパクト Lie 群の商群

古典型コンパクト Lie 環の自己同型群

(田中-T.)

例外型コンパクト Lie 群  $G_2$

(田中-保倉-T.)

# 1. 対蹠集合

$M$  : Riemann 対称空間

$s_x$  :  $x$  に関する点対称  $x \in M$

$S \subset M$  : 対蹠集合

$\Leftrightarrow \forall x, y \in S \quad s_x y = y$

$|S|$  : 集合  $S$  の元の個数

$\#_2 M$  :  $M$  の 2-number

$= \sup\{|S| \mid S \text{ は対蹠集合}\}$

$S$  : 大対蹠集合  $\Leftrightarrow \#_2 M = |S|$

Riemann 対称対の線形イソトローピー作用の軌道になる Riemann 対称空間: 対称  $R$  空間  
等長変換全体の単位連結成分の元で写り合う  
: 合同

定理 1.1(田中-T.) 対称  $R$  空間において

(A)  $\forall$  対蹠集合  $\subset \exists$  大対蹠集合

(B) 大対蹠集合同士は合同

大対蹠集合は対称  $R$  空間を線形イソトローピー作用が定める対称対の Weyl 群の軌道になる。

## 2. 古典型コンパクト Lie 群の商群

コンパクト Lie 群 : 両側不変 Riemann 計量

$\Rightarrow$  コンパクト Riemann 対称空間

単位元を含む極大対蹠集合  $\Rightarrow$  部分群

$$\cong \mathbb{Z}_2 \times \cdots \times \mathbb{Z}_2$$

多くの古典型コンパクト Lie 群 : 対称  $R$  空間

古典型コンパクト Lie 群の商群 : 一般には対称

$R$  空間ではない

$$\Delta_n = \left\{ \begin{bmatrix} \pm 1 & & \\ & \ddots & \\ & & \pm 1 \end{bmatrix} \right\} \subset O(n),$$

$$\Delta_n^+ = \{g \in \Delta_n \mid \det g = 1\}$$

$\Delta_n$  と  $\Delta_n^+$  はそれぞれ  $U(n)$ ,  $O(n)$ ,  $Sp(n)$  と  $SU(n)$ ,  $SO(n)$  の共役を除いて一意的な極大対蹠部分群

これらは大対蹠集合になり、定理 1.1 の (A) と (B) が成り立つ。

$$D[4] = \left\{ \begin{bmatrix} \pm 1 & 0 \\ 0 & \pm 1 \end{bmatrix}, \begin{bmatrix} 0 & \pm 1 \\ \pm 1 & 0 \end{bmatrix} \right\} \subset O(2)$$

$$Q[8] = \{\pm 1, \pm i, \pm j, \pm k\}$$

自然数  $n$  を  $n = 2^k \cdot l$  ( $l$  : 奇数) と分解し、

$0 \leq s \leq k$  に対して

$$D(s, n)$$

$$= D[4] \otimes \cdots \otimes D[4] \otimes \Delta_{n/2^s}$$

$$= \{d_1 \otimes \cdots \otimes d_s \otimes d_0 \mid d_i \in D[4], d_0 \in \Delta_{n/2^s}\}$$

定理 2.1(田中-T.)  $\mu$  : 自然数、  
 $\mathbb{Z}_\mu$  :  $U(n)$  の中心内の  $\mu$  次巡回群、  
 $\theta$  : 1 の原始  $2\mu$  乗根、  
 $\pi_n : U(n) \rightarrow U(n)/\mathbb{Z}_\mu$  自然な射影  
 $U(n)/\mathbb{Z}_\mu$  の極大対蹠部分群は次のいずれかに  
 共役

(1)  $n$  または  $\mu$  が奇数の場合、

$$\pi_n(\{1, \theta\}D(0, n)) = \pi_n(\{1, \theta\}\Delta_n)$$

(2)  $n$  かつ  $\mu$  が偶数の場合、

$$\pi_n(\{1, \theta\}D(s, n)) \quad (0 \leq s \leq k)$$

ただし、 $(s, n) = (k - 1, 2^k)$  の場合を除く。

注意  $\Delta_2 \subsetneq D[4]$  より

$$D[4] \otimes \cdots \otimes D[4] \otimes \Delta_2$$

$$\subsetneq D[4] \otimes \cdots \otimes D[4] \otimes D[4]$$

すなわち  $D(k-1, 2^k) \subsetneq D(k, 2^k)$  が成り立ち、 $D(k-1, 2^k)$  は極大ではない。

定理 2.2(田中-T.)  $\mu : n$  の約数、  
 $\mathbb{Z}_\mu : SU(n)$  の中心内の  $\mu$  次巡回群、  
 $\theta : 1$  の原始  $2\mu$  乗根、  
 $SU(n)/\mathbb{Z}_\mu$  の極大対蹠部分群の共役類は、  
 $\Delta_n, D[4], D(s, n), \theta$  を使って記述できる。

詳しい結果は予稿集参照

定理 2.3(田中-T.)

(I)  $O(n)/\{\pm 1_n\}$  の極大対蹠部分群は次のいずれかに共役

$$\pi_n(D(s, n)) \quad (0 \leq s \leq k)$$

ただし、 $(s, n) = (k - 1, 2^k)$  の場合を除く。

(II)  $n$  : 偶数、 $SO(n)/\{\pm 1_n\}$  の極大対蹠部分群は  $\Delta_n, D[4], D(s, n)$  を使って記述できる。

(III)  $Sp(n)/\{\pm 1_n\}$  の極大対蹠部分群は次のいずれかに共役

$$\pi_n(Q[8] \cdot D(s, n)) \quad (0 \leq s \leq k)$$

ただし、 $(s, n) = (k - 1, 2^k)$  の場合を除く。

### 3. コンパクト Lie 環の自己同型群

定理 3.1(田中-T.)

$$(I) \tau : \mathfrak{su}(n) \rightarrow \mathfrak{su}(n); X \mapsto \bar{X}$$

$\text{Aut}(\mathfrak{su}(n))$  の極大対蹠部分群は次のいずれかに共役

$$\{e, \tau\} \text{Ad}(D(s, n)) \quad (0 \leq s \leq k)$$

ただし、 $(s, n) = (k - 1, 2^k)$  の場合を除く。

(II)  $\text{Aut}(\mathfrak{o}(n))$  の極大対蹠部分群は次のいずれかに共役

$$\text{Ad}(D(s, n)) \quad (0 \leq s \leq k)$$

ただし、 $(s, n) = (k - 1, 2^k)$  の場合を除く。

(III)  $\text{Aut}(\mathfrak{sp}(n))$  の極大対蹠部分群は次のいずれかに共役

$$\text{Ad}(Q[8] \cdot D(s, n)) \quad (0 \leq s \leq k)$$

ただし、 $(s, n) = (k - 1, 2^k)$  の場合を除く。

#### 4. 例外型コンパクト Lie 群 $G_2$

$$F(s_e, G_2) = \{e\} \cup M_1^+, M_1^+ \cong G_2/SO(4)$$

$$o \in M_1^+, F(s_o, M_1^+) = \{o\} \cup M_{1,1}^+$$

$$M_{1,1}^+ \cong (S^2 \times S^2)/\mathbb{Z}_2 \text{ これの極大対蹠集合}$$

$$A = \{[e_1, \pm f_1], [e_2, \pm f_2], [e_3, \pm f_3]\}$$

$$A_{1,1} : A \text{ に対応する } M_{1,1}^+ \text{ の極大対蹠集合}$$

定理 4.1(田中-保倉-T.)

$$\{o\} \cup A_{1,1} : M_1^+ \text{ の極大対蹠集合}$$

$$\{e, o\} \cup A_{1,1} : G_2 \text{ の極大対蹠部分群}$$

いずれも合同、共役を除いて一意的

$G_2 = \text{Aut}(O)$  とみなせる。

準同型  $\psi : Sp(1) \times Sp(1) \rightarrow G_2$  を定めることができ、

$$SO(4) \cong \psi(Sp(1) \times Sp(1)) \subset G_2$$

定理 4.2(田中-保倉-T.)

$M_1^+$  の極大対蹠集合は

$\{\psi(1, -1), \psi(i, \pm i), \psi(j, \pm j), \psi(k, \pm k)\}$  に

合同になる。 $G_2$  の極大対蹠部分群は

$\{\psi(1, \pm 1), \psi(i, \pm i), \psi(j, \pm j), \psi(k, \pm k)\}$  に

共役になる。